Bibliophiles

ビブリオファイルズ　No.6(2019 年度)

新着図書案内・お知らせ　西宮東高校図書館

『たゆたえども沈まず』　原田マハ

実在の画家を登場させた美術小説を書き続けていている原田マハ。彼女は、日本人にあまりに人気のあるゴッホを取り上げることには「気おくれ」する心があったそうです。しかし、ある日本人の画商の存在を知ることで、ゴッホを主人公とするこの小説が生まれることになりました。「日本人がなぜあんなにゴッホに惹かれるか。それはやはりゴッホの絵に浮世絵のような日本美術を感じるからだと確信できました。」家族のきずなをテーマにした**東野圭吾の新作『希望の糸』**も入りました。

『史上最強の哲学入門　東洋の哲人たち』　飲茶

ある禅寺の師匠が、お弟子さんにこんな問題を出します。「片手で拍手をすると、どんな音がするのか？」片手では拍手は出来ませんので、もちろんお弟子さんは答えに困り、あれこれトンチを使って答えようとしますが、何と答えても師匠から怒られてしまいます・・

一見、無茶な問題に見えるこの禅問答には、実は深い意味があるのです。この本を読んで、インド・中国・日本の「東洋哲学」のこうした教えに触れてみて下さい。

『まんがでわかる天気痛の治し方 気圧による不調をズバッと解決!』あさば　他

あなたは雨が降ると頭痛がしたり、台風が来るとめまいがしたり、今のような梅雨の時期に気分がすぐれなかったりしませんか？もしそうなら、あなたは「天気痛」なのかも知れません。自律神経と深く関わっているこの症状は、漢方薬や耳マッサージ、食事に気を配ることなどによって治ります。本書は、日本で唯一の天気痛ドクターとして、NHK「ためしてガッテン」などで活躍する佐藤純医師が監修しています。ぜひお試しを。

『世界推理短編傑作集』全５巻　江戸川乱歩・編

あの江戸川乱歩が編集した、推理小説の歴史上名高い傑作短編を集めたアンソロジーです。1960 年に刊行されてから 60 年近くも読み継がれてきましたが、このたび装いもあらたに新版が出ました。

新版は新しい解説が加えられたほか、出来る限り忠実な翻訳を心がけるために、もう一度全ての作品の原文をチェックし直したそうです。この夏、ミステリーの醍醐味が凝縮されたこの５冊を読んで、謎解きの魅力に触れてみませんか。

『公立・私立中堅校から東大に入る本』　和田秀樹

筆者は灘中から東大理Ⅲに行った秀才で教育家としても著名ですが、その彼によれば「有名進学校でないと東大に入れないというのは嘘」なのだそうです。頭脳そのものはさほど個人差がなく、東大に入ることに強いあこがれを感じ、「灘高校方式による勉強」を続ければ、必ず東大に合格できるのだとか。お試しあれ。

『ゼロからはじめるスケートボード 初中級編』立本和樹、内田“チヒロック”ちひろ他

東京五輪で新競技として採用されるスケートボード。本書には、その基本的な技術の習得が詳しい写真付きで解説されています。また、スノーボードの練習になるトレーングも紹介されていますよ。

『共感 SNS 丸く尖る発信で仕事を創る』ゆうこす

元アイドルで自己プロデュースを始め、「モテクリエイター」という新しい肩書きを作った菅本裕子こと、ゆうこす。本書はズバリ、「SNS でいかにして共感を得られるか」をゆうこすが指南したもの。SNS をやっている人や、自己プロデュースに興味がある人におすすめ。

☆図書館からのお知らせ☆

読書感想文コンクールに応募出来ます！

課題図書は『この川のむこうに君がいる』『ザ・ヘイト・ユー・ギヴ』『ヒマラヤに学校をつくる』の３冊で、どれも図書館にあります。その他の本を選んでも自由読書枠で応募できます。字数は２千字以内、校内締切は 8/29（木）で図書館の学校司書まで提出して下さい。

夏休み前の長期貸出し、実施中！

今借りると、返却は 8/29（木）。
ただし、漫画の長期貸出はしません。

夏休み中の開館日

7/22（月）～26（金）、8/19(月)～23（金）の、いずれも 9:00~13:00 まで。7/16（火）～18（木）、22（月）～26（金）は保護者の方も本を借りられる「オープン図書館」を開催します。

『図解　英単語イメージ辞典』　政 村 秀 實

「絵本のような英語の辞典」を目指して出来た本です。例えば compare（比べる）なら、ある人が二つのミカンを両手に持つイラストが描かれて、「com（一緒に）pare（並べる）」と語源が書かれています。単語のイメージが意味と結びついて、とても覚えやすいと思いますよ。

今号のひとこと

Mon oreille est un coquillage　Qui aime le bruit de la mer.　僕の耳は貝殻だ、海のざわめきが大好きなのさ。　ジャン･コクトー(1889-1963)

『カンヌ』より。この詩を堀口大學は**「私の耳は貝の殻　海の響をなつかしむ」**と訳しましたが、この有名な訳は「美し過ぎる」という理由で私はあまり好みません。上で私は「ざわめき」と訳しましたが、仏語の bruit に一番近い日本語は「雑音」。本来は心地良いイメージの言葉ではありません。海の雑音・・吹く風や波の音、水しぶき、海鳥の鳴き声・・そうした「海の雑音を愛する」というユーモアにこの詩の独自性がありますので、これを「海の響をなつかしむ」と訳すのは、美しいイメージに焼き直した、一種の「創作」に近いものと思います。